前鼻孔閉鎖症の一治験例

かとう まさあき たかはし ひろあき
加藤 雅明・高橋 宏明*

緒 言

前鼻孔閉鎖症の報告は、比較的少なく、馬場¹⁾らおよび広戸²⁾らの集計によれば、本邦では戦傷を除いては約30例にすぎない。そして、その大多数は後天性である。一方成書によれば、高橋³⁾は、後鼻孔閉鎖症は先天性に発来するものが断然多いのに反し、前鼻孔閉鎖症は後天性に発来するものがほとんどを占めると述べている。反面、Peer⁴⁾は、Atresia of the anterior nares は先天性の骨性あるいは膜性閉鎖であると述べている。この様な差は前鼻孔閉鎖症の定義に関する問題であろう。

最近私達は、先天性梅毒によるものと思われる右前鼻孔閉鎖症の1例を経験し、手術的に治癒せしめたので、ここにその概要を報告する。

症 例

患 者：■■■■ 26才、男子

初 診：昭和46年11月29日

主 訴：右鼻閉。

家族歴：特記すべき事なし。

既往歴：昭和40年鞍鼻に対し隆鼻術を受けた。鼻部外傷(-)。梅毒(-)。

現病歴：生来鼻閉はあるも他の自覚症状なし。

局所所見：右前鼻孔に狭窄があり、細い綿棒が辛うじて通る程度である(第1図)。左側もやや狭窄気味である。しかし後鼻鏡検査では、後鼻孔は良く開通している。鼻翼部はやや左右非対称的であり、また口唇部には、Rhagadenと思える多数の皺襞が見られた(第2図)。

検査所見：血清梅毒反応は、第1回検査では陰性であったが、念のために行なった第2回検査では、TPHA法のみ陽性を呈した。鼻X線単純撮影では、とくに異常は認められない。鼻腔内造影では第3図のごとく、狭窄部は前鼻孔部の前後径約1cmの範囲のみであり、それより後方の鼻腔は正常に造影された。

第1図

A Cured Case of Atresia of the Anterior Noses
Masaaki Kato and Hiroaki Takahashi

* 大阪医科大学耳鼻咽喉科学教室 (主任：武田一雄教授)

第 2 図

第 3 図

手術：昭和47年1月24日，全身麻酔下に鼻孔形成術を施行した．まず，口腔内より口唇歯肉移行部に切開を加え，軟部組織を剝離し，梨子状孔縁を広く露出させると，梨子状孔は左右非対称的であって，右側の底部が楕様に隆起していたので，これを左側の高さまで削除した．第4図はこの楕様隆起を若干削除した状態の写真である．次で鼻腔下壁および側壁の軟部を剝離し，狭窄部の後壁に達し，ここで瘢痕組織を切除した．続いて鼻孔より狭窄部に第5図のご

第 4 図

第 5 図

とく逆Y字切開を加え、生じた3つの弁のうち鼻中隔側のものは切除し、他の2つの弁はそれぞれ側方および下方へ翻転縫合を行なった。このようにして狭窄部を十分に拡大した後、右鼻腔内を見ると、下甲介が肥厚している以外に異常所見は無かった。

術後経過：術後の肉芽組織増殖を抑制するため、約1週間はガーゼタンポンによる圧迫を施し、タンポン除去後は毎日ステロイド軟膏を創部に塗布するとともに、ステロイドのネブライザーを施行した。その後、約半年間経過を観察したが、右前鼻孔は第6図のごとく十分な広さに保たれている。

考 按

諸言に述べたごとく、本疾患の成因は少なくとも本邦での報告例に関する限り先天性のものは稀であり、後天性によるものが多いとされている。その原因についてみるに、後天性のものでは、痘瘡、火傷、湿疹、外傷、梅毒などによるものが多く、先天性のものでは先天性梅毒によるものと、全く潜在疾患の不明な先天性奇形とに分けられる。ひるがえって、本症例についてその原因を考えるに、患者からの問診では両親の梅毒の有無も解らないので、決定的なこととは言えないにしても、既往に鼻部外傷や特別な鼻疾患のないこと、第2回検査による血清梅毒反応の弱陽性、左側にもやや狭窄が存在すること、梨子状孔縁の骨性隆起や鞍鼻があったこと、および口唇部の Rhagaden の存在などから考えて、先天性梅毒による可能性が強いものと思われる。

次に手術方法について述べる。本疾患には膜様閉鎖のみのものと骨性閉鎖を伴うものがあり、その前後径も種々であり、さらには外鼻奇形の存在するものさえあって多種多様であるため、手術方法も症例によって異なることは当然

第 6 図

である。ただし薄い膜様閉鎖の場合を除いては、私達の行なったように口腔内より口唇歯肉移行部に切開を加え、梨子状孔を経て手術を行なうと、鼻腔内を直視でき、骨異常がある場合の処置も容易で広い術野が得られる。また、軟部組織を翻転する場合、その縫合固定が容易である。一般に本疾患に対して形成手術を行なった場合、術直後は十分な広さの前鼻孔が形成されても、術後次第に狭窄することが稀でない。これを予防するためには術時には、やや過度な広さの前鼻孔を形成すること、および創面を皮弁で被うことが必要であるが、私達の行なった手術法はこれらの点に関して便利な方法であると考えられる。

結 語

26才の男子に見られた先天性梅毒によると思われる右前鼻孔閉鎖症の1例を手術的に治癒せしめ

得たので、その原因および手術方法を中心に報告した。

武田一雄教授の御校閲に深謝する。本論文の要旨は、昭和47年4月22日、日本耳鼻咽喉科学会大阪地方会第161回例会において発表した。

文 献

- 1) 馬場駿吉, 他: 前鼻孔閉鎖症の一治験例, 耳鼻臨床 56: 660-664, 1963.
- 2) 広戸幾一郎, 他前鼻孔閉鎖症の形成手術2例, 耳鼻 12: 222-226, 1966.
- 3) 高橋 良: 先天性内鼻奇形, 日耳鼻全書2巻2冊 11-12, 金原出版 1954.
- 4) Peer, L.A.: Atresia of the Anterior nares. Oto-

laryngology vol. III, Chapter 4, P. 13~15,
Harper & Row, Publishers 1972.

(原稿到着: 昭和48年3月27日
別刷請求先: 加藤 雅明
〒569 大阪府高槻市大学町
大阪医科大学耳鼻咽喉科学教室)